

## 「語り物」から見る志怪・伝奇の世界

高橋稔著

古代中国の語り物と説話集



A5判 236頁  
 東方書店  
 [本体 2,400円 + 税]

山崎 藍

本書の著者略歴に「語り物研究者」とある通り、著者は『中国説話文学の誕生』（東方書店、一九八八年。以下「前著」と略す）を始め、「語り物」に関する論著を数多く発表されてこられた。本書は前著の続編と言えるものであり、著者の新たな知見を得ることができる。平易な文体に加え、主要作品には原文と翻訳が附されており、中国文学研究者や中国文学を専攻している学生に留まらず、志怪や伝奇に関心を持つ一般読者にも手に取りやすい工夫がなされているのも特徴である。

著者自身が記している通り、本書は「上代の狭義の語り物から始めて、六朝時代の『列異伝』から始まる広義の語り物を見、『列異伝』との比較の必要から、下限に『太平広記』を見る事」（二九五頁）を企画、意図しており、序と三つの章、跋、その他（年表・図版出典一覧・地名所在図）で構成されている。

以下、内容紹介に入る前に、書名にもある「語り物」が何を指すのかを確認しておこう。分かるように掴みきれないこの語について、著者は序で「中国古代の伝承説話に分類されるべきもので、語りの行なわれる場所や語る人間には、特に制約がない」ものを中国古代における広義の「語り物」、「鍛え抜かれて十分に洗練された語りの技艺を身に付けた者だけに許される『語り物』（いずれもi頁）を狭義の「語り物」と定義する。その上で、第一章「古代中国の語り物三種」では、「六朝時代以前の古い中国の古典資料の中から、間違いなく中国古代の語り物を記しているという保証の取れる文章」（i頁）を分析し、その特色を探る。例えば三節「司馬遷の聞いた語り物」では、「その文中に『語り物』でなければ現れ得ない表現が見られる」だけでなく、「『史記』の『刺客列伝』の

賛に、司馬遷が街で聴いた荊軻の始皇暗殺の「語り物」を批判しており、そこに記された文言が『燕丹子』の話の筋に一致する（いずれも二頁）ことにより、「燕丹子」を取り上げる。著者は「燕丹子」に巧みに工夫された語りの技法を見だし、この手法が「燕丹子」よりも遙か後に書かれた敦煌変文の別な作品の語りにも応用されている可能性を提起する。その理由を、「他に類例のない精巧な語りの工夫が聴衆の人気を集めていたからに他ならない」（二二頁）とし、「燕丹子」の語りの句作りから、講史の祖型がすでに漢代にあったと考察する。

第二章「志怪の生みの親となった『列異伝』」は、タイトル通り『列異伝』分析が要となつている。著者は魯迅『古小説鈎沈』本に輯録される『列異伝』逸文五〇条を主題別に分類し、五〇条全てに翻訳を施す。その分析から、『列異伝』は下層文化を吸い上げ文化の刷新に役立てる精神に則り、民衆の持つファンタジー、すなわち、身分の低い者が伝える伝承説話を集めた「話ばかり集めた類書」であるとし、「魏文帝の遺志を汲んで『列異伝』の完成に努めた人々の望んだものは、現実の厳しさを忘れて夢の世界を語る民衆の屈託のないイマジネーションだった」（二四〇頁）と述べる。続く五節以降は、産神問答、妖怪退治とタブー、比翼相思樹伝説を取

り上げる。六朝時代に書かれた語り物と志怪の関係を「六朝時代では、芸人が志怪を読んで取り込んだのではなく、志怪の話を読むのを聞いて、自分の話に取り込んだのではなく、志怪から、言い換えれば、広義の語り物から狭義の語り物へ話の筋を取り込んだということになる」（二五四頁）と指摘する（なお、五節以降は紙面の都合かやや簡略な記述である。評者が調べた限り、産神問答は「中国六朝志怪の中に見られる昔話について」（『芸国語国文学』一五、一九七九年）、妖怪退治とタブーは「六朝志怪の中に見られる説話伝承の痕跡について」（『東京学芸大学紀要第二部門人文科学』三三、一九八二年）、比翼相思樹伝説は「中国の昔の昔話「韓憑夫婦故事」の伝承事実の裏付けについて」（『学習院女子短期大学国語国文学会国語国文学論集』七、一九七八年）などに著者の考察がある。本書と併せて一読を勧めたい）。

第三章は「隋唐代における語り物と小説との関係」と題し、隋唐以降の資料が主な検討対象である。著者は「補江総白猿伝」や「遊仙窟」といった隋初唐期の作品に語り物の影響が見受けられること、唐独自の小説の文体が形成されるのは安史の乱以降であり、自由な古文体をもとに、語り物の特色と言える四字句を適宜用いていることを指摘する。更に『太平広記』の分類項目を挙げ、『太平広記』と『列異伝』との共通点に「『小説』に対する扱い方」を見いだす。「それまで日

の目を見ることのなかった下層の文化を吸い上げて広く紹介し、枯渇してしまった文化を刷新する」ことにあった『列異伝』の編纂意図に対し、『太平広記』は「新しい統一王朝の初めに当たっては、為政者の心配は、知識分子の懐柔にあった……従ってその一環として企画された『話ばかりを集めた類書』である『太平広記』の編纂方針が、できる限り多くの話を集めることにあったのは当然」（いずれも一九九頁）と述べる。最後に『太平広記』の唐代伝奇に対する見方、および、そこから見えてくる『列異伝』の特徴に言及し、『隋書経籍志』雑伝類の挙げている六朝志怪書に共通する所は、「いずれも収められているのは、ファンタスティックな物語ばかり」とし、「ファンタスティックな世界に人の想像力の領域を広げる目的を持って、中国で初めての伝承説話集『列異伝』が作られたと私は考えたい」（いずれも二〇八頁）と言う。そして、話の種類に関わりなく事項別に分類していた『太平広記』が、独自の主題を有する伝奇小説を既成の事項に当てはめて分類することは困難であったため、「雑伝記」として『太平広記』の最後にまとめられたと結論付ける。

本書は一貫して語り物の視点から作品を読み解かんとし、『燕丹子』を始め「古詩無名人為焦仲卿妻作」「日出東南隅行」「鶯鶯伝」といった主要作品を翻訳する際、語りの口調に合

わせ原文を区切って附すという新しい試みを採用している。これが大変効果的で、例えば「燕丹子」冒頭部の緊迫した場面、早口の語り口調に有効に作用したであろう構成——内容転換とは関わりなく、音節の数を揃えて対句を作っている点——には驚かされた。原文の句切りを見れば、翻訳だけでは分からない文字数や韻を意識し、語り物のリズムを体感できる。語り物に不慣れた読者の理解を助けるのにも非常に有益であろう。また本書の主要テーマである『列異伝』について、民間伝承の記録と思われる作品を多く含むのが特徴とする従来の説から、より踏み込んだ大胆な結論を出されているのは刺激的であった。『列異伝』の成立時期や、『列異伝』と『搜神記』どちらが先に成立したかなど、『列異伝』研究はほとんど進んでいない。このような現状に対して著者が本書で示した様々な分析方法と問題提起、そして結論は、『列異伝』や語り物研究に一石を投じるものであることは間違いない。

ただ、『列異伝』の校本として国内だけでも富永一登氏や先坊幸子氏らによる研究があり、『古小説鈞沈』本には『列異伝』ではない文が数条紛れている可能性が高い他、『古小説鈞沈』本には載せられていない逸文があることが指摘されている（なお本書刊行とほぼ同時期の二〇一七年八月に、中島長文校・伊藤令子補正「魯迅『古小説鈞沈』校本」（京都大学文学研究

科中国語学中国文学研究室) がリポジトリ公開された。校勘・異文を詳細に記した労作であり、『列異伝』に関しても、異文の存在および『天地瑞祥志』などに記載がある逸文五話を挙げている)。しかし、本書第二章では異文や新たな逸文の存在には触れず、五〇条を分類して議論を進めている。研究者ならば周知の事実であり、言及する必要はないとの著者の考えがあったのかもしれないが、「〔列異伝〕逸文五〇種の内、六割近くの話に〔昔話〕の基本的スタイルである) 序破急の三段構成が見られる」という事は、昔話的な話の内容に興味があつて話を集め記したと考えてよい(八三頁。括弧内は評者加筆)といつたように、数を論拠のひとつとしていることを踏まえれば、『古小説鈎沈』本の危うさについて一言触れて欲しかった。また評者は、『列異伝』を含めた志怪書編纂の基底に流れるのは、身の回りで起きた事件や古より伝わってきた「異」なる出来事を記録し、その意味を探求することにあるとこれまで認識してきた。そのせいか、『列異伝』が志怪作品の中で重要な意味を持つものであるとの本書の主張は理解したが、しばしば「イメージーション」「想像力」「ファンタジー」などの語で『列異伝』や志怪を説明しようとする点に若干違和感を覚えてしまった。とは言え、これらの疑問は瑣末な事であり、評者の力不足ゆえの放言とお許し願いたい。

最後にひとつ評者の希望を述べて筆を置く。本書には前著のような注が附されず、著者の考えの根拠となる文献を知りたくなつたり興味を沸いたりした折、それを解決する手立てがないのが些か残念であつた。本書を読了後、志怪や伝奇に興味を持つならば、語り物の存在を意識しなければならぬとの思いを強くしたためである。紙面の都合であるうが、せめて参考文献があれば、それを手がかりに知識を深められたであろう。もしくは、各章が著者の多くの論著のどれをもとに加筆されたのかが分かるだけでも、評者を含めた読者の道標となつたに違いない。跋に「中国の語り物に関する研究はまだ出発して間もない」(二二頁)とあるが、本書によって語り物研究は新たな一歩を踏み出した。語り物に関する著者の論著が更に出ることを切望しており、その際には検討頂ければ幸いである。

(やまざき・あい 青山学院大学)